

栗には<sup>いが</sup>毬があります。

実が熟する前に、動物に食べられたり、虫が侵入したりしないように、たくさんのがった針のような形で守るのです。

栗の毬を見ていると、私たちが自分を守るために<sup>まと</sup>纏う、怒りや恐怖の感情を連想をしてみます。私たちは自分を守ろうとして、近づいてくる相手を攻撃したり、恐怖の感情から強く身構えたりすることがあります。

しかし、それは本当に自分を守ることになるのでしょうか。

<sup>しやかさま</sup>お釈迦様の時代、インドでパセーナディという王が「自己を護る」ということについて、お釈迦様に質問をしています。お釈迦様の教えをいつも熱心に聴いている王です・・・。

「お釈迦様、私は一人静かに坐って、このような事を思いました。いったいどのような人が自己を護っていて、どのような人が自己を護っていないのだろうか、と。そして次のように考えました。

どんな人であっても、悪しき行いをなし、悪しき言葉を用い、悪しき思いを抱いているならば、その人の自己はよく護られていません。たとえ彼らが、象の軍よ守れ、戦車よ守れ、歩兵よ守れといったとしても、彼らの自己は決して護られないだろう。

また、なんびとであっても、善き行いをなし、善き言葉を語り、善き思いを抱いているならば、象の軍よ守れ、戦車よ守れ、歩兵よ守れといわなくても彼らの自己は護られているのだ、と。」

お釈迦様は、王の言葉に同意します。

「大王よ、その通りである。なんびとであっても、行いと言葉、思いによって悪しきことをなせば、その人の自己は護られず、またなんびとであっても、行いと言葉、思いによって善きことをなせば、その人の自己はよく護られるのである。」

怒りによる攻撃や、不安による身構えといったいわば心の毬は、他者に対して善き影響を与えることにはならず、その意味では「悪しきこと」となるでしょう。

## 『 禅のこころ -曹洞宗- 』

---

お釈迦様の言葉に従うのならば、それは決して自分を護ることにはなりません。むしろ心の毬を脱ぎ捨てることが必要だと、お釈迦様は教えてくださっているのだと思います。心の毬を脱ぎ捨てた時、善き行い、言葉、思いが表に現れ周囲に幸せをもたらすことでしょう。

同じように、栗も実が熟すと自然に毬が割れて、実が表に現れます。毬を脱ぎ捨てた栗は、そのおいしさで私たちに幸せをもたらします。

秋の日に、栗を食べながら、そのように思いをめぐらせてはいかがでしょうか？

— 終 —